

学位論文要旨

言語生活の拡張を志向する説明的文章学習指導の研究

—中学校カリキュラムの検討を中心として—

広島大学大学院教育学研究科

文化教育開発専攻 国語文化教育学分野

D152605 舟橋 秀晃

1. 研究の目的と方法

(研究の目的)

国語科説明的文章学習指導では、社会科や理科でない国語科独自の「自律性」が追究されてきた。だが、社会的構成主義学習観に立つエンゲストロームの拡張的学習理論に依れば、その「自律性」は学校学習の「カプセル化」の問題として批判的に捉え直されることになる。

ソーシャル・メディアの発展につれ内向化傾向が目立ってきた学習者の言語生活を向上するには、学校学習の「カプセル」化と学習者の言語生活の内向化に抗い、彼らの言語生活の拡張を志向する説明的文章学習を構築する必要がある。そのためには、筆者の論理を追う読みの力に加え、読者自身が論理的に考え議論に参加するような読みの力を学習者に育てる必要もあって、それにはトゥールミン・モデルなどの非形式論理学的知識が欠かせないはずである。しかしながら、現状では中学生の根拠確認や論証評価の実態には課題があるとの指摘がある。その要因には実践者に広く見られる論理観の混乱があり、その背景には学習指導要領の問題もある。

これらをまとめると、国語科説明的文章学習指導の現状は、次の三つの課題を抱えていると言える。①読解指導からメディア・リテラシーへの接続に課題がある。②中学校段階での系統性にお不明確な部分がある。③説明的文章教材の論理の捉え方に関し、混乱が続いてきた。

本研究は、①～③の現状にまつわる諸課題を解明するために、稿者が反省的実践家を志し実践の理論化と理論の実践化を図ろうとしてこれまでに進めてきた一連の研究を整理統合し補うとともに、特に課題の多い中学校段階について、国語科説明的文章学習において論理的に読む能力を育成するためのカリキュラム・モデルを具体的に提案しようとするものである。

(研究の方法)

本研究では、学習観の基礎に社会的構成主義に基づくエンゲストロームの拡張的学習理論を置く。またその不足を補うべく、学習者の能力発達の垂直次元的系統の設定にはクーンの「個人の認識論」の知見、学校学習を社会的文脈へ接続する水平次元的系統の設定には「間テクスト性」に関する議論を参照する。これにより説明的文章の読みを教科書教材の外へ拡張する学習の方途と道筋を探るとともに、自実践の到達点も述べる。その手順は、次の通りである。

第1章では、言語生活の拡張を志向する説明的文章の読みの国語科カリキュラムを設計するにあたり、①～③の現状が生じる背景を探るため、先行研究の主要な動向と課題を把握し検討する。まず国語教育におけるカリキュラム研究の全体状況を確認する(第1節)。次に説明的文章の能力論の問題状況(第2節)と、読むことの教材論における問題状況(第3節)を捉える。そして、浮上した諸課題を能力面(I)、教材面(II)、学習活動面(III)の三側面から整理し直し、研究課題を再設定する(第4節)。

第2章では、言語生活の拡張を志向する説明的文章の読みに必要な能力(I)の発達の道筋を、どのように捉えるべきかを検討する。まず説明的文章教材の読みの能力を、単に文字や語句の意味が分かるといった程度に留めず積極的に、〈説明的文章の意味と意義・価値を理解し自分の考えをもつ能動的な読書行為〉であると規定する(第1節)。次いで、エンゲストロームの拡張的学習理論から系統性を垂直次元と水平次元の2方向で捉える示唆を得て、説明的文章学習との対応を検討する(第2・3節)。そして、垂直次元では「個人の認識論」、水平次元では「間テクスト性」を援用して系統の各段階を設定する(第4節)。

第3章では、小中学校国語教科書に掲載されている説明的文章教材(II)が内包する系統性の分析を通して、第2章で設定した垂直次元と水平次元の系統性と対応する要素が既存の教科書教材にも存在することを確認する。その上で、特に中学校段階において学習による言語生活

の拡張を図るのに、主教材としての教科書教材以外にどのような教材を追加し得るのか、その可能性を探る。はじめに教科書教材分析の先行研究を概観する（第1節）。次に国語教科書の説明的文章教材について、小学校教材の系統性を先行研究結果から見出す（第2節）。また、中学校教材の系統性を独自に分析する（第3節）。その上で、中学校における国語教科書教材と併せて必要な教科書外教材の種別・配列のモデルを例示する（第4節）。

第4章では、国語教科書の外へ説明的文章の読みを拡張する学習活動（Ⅲ）がどのような構造をもち得るかを検討する。まず、拡張しやすい効果的な策である「教科書教材に他の教材を組み合わせる読む学習活動に取り組んだ小中学校の実践」について、これまでの実践を収集し観察して学習活動の類型を見出す（第1節）。次に、文章の外の社会的文脈から文章を分らせるのではなく、学習者各々の個人の文脈に立脚した学習活動を生む策としての、〈仮想的状況〉を設定することと〈書かれなかったこと〉をも吟味させることの有効性を述べる（第2・3節）。最後に、本章を通して論じた学習活動のあり方を、垂直・水平2方向の系統性を踏まえ、概括して述べる（第4節）。

第5章では、言語生活の拡張を志向する説明的文章の読みの中学校国語科カリキュラムを設計する。まず、前章までの各章を再整理し、読みの拡張を志向する説明的文章学習指導のカリキュラム理論とそれに基づく中学校カリキュラム・モデルをまとめて示す（第1節）。次に、カリキュラムの観点から学習指導実践個体史を検討する（第2節）。そして第1節のカリキュラム理論に基づき、個体史上課題の残っている第2学年について単元計画を立て、実施と検討を経て、小中学校9年間のカリキュラム設計の一つのあるべき姿を具体的に示す（第3節）。

終章では、本研究の成果を総括し、また今後の展望として①～③の現状への提言も行う。

2. 論文の構成

序章 研究の目的と方法	1
第1章 先行研究の検討	9
第1節 国語科カリキュラム研究の主要な動向と課題	9
第2節 国語科説明的文章学習指導における論理観の整理と課題	
一筆者・読者それぞれの論理に着目して一	19
第3節 小中学校国語科「読むこと」教科書外教材の位置の変遷と議論	
一よき典型から練習教材への教材概念拡張の動きと異論一	32
第4節 国語科説明的文章学習指導における諸課題の整理と課題の再設定	45
第2章 言語生活の拡張を志向する説明的文章の読みの能力とその系統	47
第1節 社会的文脈を扱う理論の必要性と課題	
一トゥールミン・モデルの限界を超えるために一	47
第2節 エンゲストロームの拡張的学習理論の検討	
一内容・形式両立のための水平・垂直2方向での捉え直し一	57
第3節 社会的文脈を扱う理論の国語科説明的文章学習との対応	67
第4節 読みの能力の垂直次元と水平次元における系統性の検討	
一「個人の認識論」と「間テクスト性」を踏まえて一	73
第3章 小中学校国語教科書教材の系統性と補助教材との関係	85
第1節 説明的文章の教科書教材分析に関する先行研究概観	
一教科書と言語生活をつなぐ非形式論理的知識への着目一	85

第2節 先行研究から小学校教科書教材に見出される系統性	
—論理的思考の発達と社会的文脈からの距離—	…… 92
第3節 分析から中学校教科書教材に見出される系統性	…… 98
第4節 教科書教材の実態と垂直・水平系統性仮説との対応	…… 115
第4章 言語生活の拡張を志向する説明的文章学習活動の構造	————— 119
第1節 拡張の観点から見た小中学校説明的文章学習活動の類型	…… 119
—社会的文脈への接続の方途としての読解指導と読書指導との連関の可能性—	
第2節 個人の文脈と社会的文脈とを相補的に扱う学習活動の類型	…… 137
第3節 社会的文脈を教材文のみから想起させる方法としての〈書かれなかつたこと〉吟味の可能性	—情報科での実践例を踏まえて— …… 159
第4節 垂直・水平2方向での系統的な学習活動の展望と課題	…… 172
第5章 言語生活の拡張を志向する説明的文章学習指導の国語科カリキュラム	175
第1節 言語生活の拡張を志向するカリキュラム理論の整理	…… 175
第2節 カリキュラムの観点から見た説明的文章学習指導実践个体史の検討	…… 189
第3節 課題解決のための実験授業とその検討	…… 214
終章 研究の総括と展望	————— 239
第1節 研究成果の総括	…… 239
第2節 今後の展望	…… 247
参考文献	————— 253

3. 各章の概要

(第1章)

第1章では、国語科カリキュラム研究(②と対応)、説明的文章学習指導における実践研究における論理観(③と対応)、学習指導要領における教科書外教材の位置の変遷とそれをめぐる議論(①と対応)に関する検討を通して、説明的文章の読みの国語科カリキュラムの研究課題を再設定した。

第1節では、中学校における段階の設定や系統性の説明になお解明の余地があることが分かった。また、他者がいてこそ必要になるのが論理であるから論理性がその教材性の中核である説明的文章学習指導でこそ社会的構成主義学習観のもとでの「垂直的アプローチ」(論理的認識や論理的思考力の系統的深化)と「水平的アプローチ」(教室にいる他者や筆者あるいは他の書物や市井の人々などとの対話による水平的相互作用の系統的拡大)の統合された姿を提示する必要があることも分かった。

第2節では、筆者と読者それぞれの認識の論理と表現の論理とを区分し、読者に筆者の認識・表現の論理を検討する練習をさせつつ読者自身の「認識の論理」構築の力を育成する方法を開発する必要があることが分かった。

第3節では、教科書外教材を使う際に今後主要な論点となり得るのが「誤りや問題をどの程度取り除き、系統性にどの程度配慮するか」であることが分かった。そして、教科書教材の典型性と教科書外に求める練習素材の幅広さを組み合わせるとどのようなカリキュラムを構想し得るのかが大きな課題になると捉えた。

第4節では、以上の各節に記したカリキュラム設計上の諸課題がカリキュラムを構成する中心的要素である能力、教材構成、学習活動構造が絡み合っていることから、これら諸課

題を能力面（Ⅰ）、教材面（Ⅱ）、学習活動面（Ⅲ）に分け、それぞれが何であるか（a）とそれらをどのように扱うか（b）の二つの観点から次のように再設定した。

I：能力面 育成すべき能力とその発達の系統（第2章）

a 説明的文章の読みの能力とはどのようなものであるか。（第1～3節）

b 読みの能力の垂直次元の系統性と水平次元の系統性はどのように設定し得るか。（第4節）

II：教材面 使用すべき教材とその構成（第3章）

a 説明的文章の読みの教材とはどのようなものであるか。（第1～3節）

b 教科書教材と教科書外に求める教材はどのように取り扱うとよいか。（第4節）

III：学習活動面 仕組むべき学習活動とその構造（第4章）

a 教科書教材と教科書外教材を組み合わせる学習活動にはどのようなものがあるか。（第1節）

b 学習活動において個人の文脈と社会的文脈はどのように取り扱うとよいか。（第2～4節）

（第2章）

第2章では能力論（Ⅰ）を展開した。説明的文章の読みに必要な能力の発達の道筋を、主にエンゲストロームの拡張的学習理論に求め、系統性を垂直次元と水平次元の2方向で捉える示唆を得た。そして、垂直次元では「個人の認識論」の知見を援用し、水平次元では「間テクスト性」をめぐる議論を参照して系統の各段階を設定した。

第1節では、議論は社会的文脈に依存して行われるにも関わらず、トゥールミン・モデルの中に文脈が位置づいていないことと、形式面と内容面の指導の両立は、現代的理解としては論理形式と文脈との照合によって図られるべきであることを指摘した。そして、説明的文章の読みを〈説明的文章の意味と意義・価値を理解し自己の考えをもつ能動的な読書行為〉だと積極的に規定すれば、読みの能力を垂直的だけでなく水平的にも捉えられることを論じた。

第2節では、発達を水平的にも説明できる理論として、エンゲストロームの拡張的学習理論を取り上げた。氏の言う「拡張的学習」は実現が非常に困難であるが、学校学習と「拡張的学習」とを架橋するものとして氏が唱えた「探究的学習」には大村はまの単元学習などの先行実践にも見出せそうな要素が多々あり、国語科への適用が充分可能であることを示した。

第3節では、第1～2節の理論と説明的文章学習との対応を検討した。エンゲストロームは言語を学習する際の水平的（空間的・社会的）次元と垂直（時間的・歴史的）次元について、それぞれの序列やレベルを何に見出すべきかについてまでは、特に論じてはいなかった。

第4節では、そこでエンゲストロームの理論を補うために、「個人の認識論」を援用して垂直次元の系統性、「間テクスト性」に関する議論を参照して水平次元の系統性を示した。中学校は「馴化」の時期にあたるので、垂直次元面において中学校では螺旋的に、再び現実主義者レベルから学習を開始して第3学年では評価主義者に到達するようなシーケンスをもつカリキュラムを設計するのが望ましいことを指摘した。また、説明的文章は国語科としての生活世界と学問的世界との統合的世界を有するが、小学校では生活世界、中学校では学問的世界にその軸足があるので、水平次元面において中学校では螺旋的に、学問的世界に軸足を置き直して改めて生活に根ざし社会へ視野を広げていくような段階性を設定するとよいことを指摘した。

（第3章）

第3章では教材構成論（Ⅱ）を展開した。小中学校国語教科書の説明的文章教材が内包している系統性を分析し、第2章で設定した垂直次元・水平次元の系統性と対応する要素が既存の

教科書教材にも存在することを確認した。その上で、特に中学校段階において学習による言語生活の拡張を図るのに、主教材としての教科書教材以外にどのような教材を追加し得るのかを探った。

第1節では、教材分析に関する先行研究を概観した。教材のもつ典型性は本来、エンゲストロームの言う「作業仮説」としてこそ取り扱われるべきであり、今後は「普遍性」や「標準性」のあるものや、かつて排除された説明書きも含めて積極的に教科書教材や補助教材に位置づけるべきであることを論じた。

第2節では、小学校教科書教材が内包する系統性について、非形式論理学的知識を踏まえて分析した先行研究を検討した。学習者の論理的思考の発達に沿って、扱う「事実」の抽象度を次第に高めつつも、典型性をもつ国語科教材としての「統合的世界」を自律的に保ち、社会的文脈からは距離を取っているという系統性が備わっていた。

第3節では、中学校教科書教材が内包する系統性について、話題主義的な光村図書と技能主義的な東京書籍を対象に据え、学年ごとに第1学年では事実、第2学年では理由づけ、第3学年では主張に特に着目して、質とその変化の様相を観察した。両社の教材の実態には第2章で明かした系統性と矛盾がないことが分析できた。

第4節では、第2～3節の結果を第2章の仮説と照合し、教科書の主教材に教科書所収の補助教材を組み合わせたたり教科書外教材を加えたりすることで、学習者の読みを学校学習から拡張するカリキュラムを構想するのが効果的であると考えられた。そこで、現行教科書を調査し、小学校では学習者に適度な負荷のかかるモデル素材が既に掲載済みであるが中学校では補助教材があまり掲載されていないことを明らかにした。それゆえ、中学校ではより積極的に教科書外の言語素材を教材化し、主教材と組み合わせる必要があると考えられた。

(第4章)

第4章では学習活動構造論(Ⅲ)を展開した。その概要としては、教科書の外へ読みを拡張する学習活動はどのような構造をもち得るかを検討した。

第1節では、第3章で導き出した策としての「教科書教材に他の教材を組み合わせる読む学習活動に取り組んだ小中学校の実践」事例を収集し、学習活動の種類の観察から、学習者個人の文脈の表出を教材の読みに並行よりはむしろ先行させる展開を採る学習活動を、今後は学年が上がるにつれ一層重視していく必要があることを明らかにした。

第2節では、稿者自身の二つの実践事例を取り上げて検討し、文章の外の社会的文脈から文章を分らせるのではなく学習者各々の個人の文脈に立脚した学習活動をつくるには、「実の場」でなくとも〈仮想的状況〉を設定すればそれが学習活動に有効に作用することを、状況論を踏まえて明らかにした。

第3節では第2節のほかに、個人の文脈に立脚して眼前の文章を読み込み、それだけで社会的文脈を想起する別パターンの学習があり得るかを検討するため、稿者が勤務していた中学校で独自に「情報科」を開発した実践事例を参照し、「書かれなかったこと」を意識することで社会的文脈を知らずとも想起できる可能性があることを示した。

第4節では、本章を通して論じた学習活動のあり方を、垂直・水平2方向での系統性を踏まえて概括した。本章で論じた〈仮想的状況〉の設定による単元導入例や、市井の文章や教科書教材の文章が一つしかなく比べる対照がない場合の四分画法や樹形図などの使用による単元展開例は、学習者の生活世界の外にある「見えないもの」を取り上げた文章で〈書かれなかったこと〉までも授業の中で文章を通して認識し吟味できることを示し得た。ただし文脈を離れたこれらの方法の利用は、国語科においては補助的な手段に留まるものであろう。

(第5章)

第5章では、前章までの各章を総合し、言語生活の拡張を志向する説明的文章の読みの中学校国語科カリキュラムを設計し、その有効性を実証した。

第1節では、第4章までに展開した能力論、教材構成論、学習活動構造論を整理し、それらを統合する形で、読みの拡張を志向する説明的文章学習指導のカリキュラム理論とそれに基づく中学校カリキュラム・モデル(試案)を設定した。まず能力の発達の系統性を水平次元と垂直次元から説明し、それが螺旋的に生活世界から学問的世界へ移行する中に中学校の「評価主義者」段階があることを改めて述べた。そして、教科書教材の学年配列に依拠しながら、教科書外に組み合わせる教材の種別や内容の配列と、個人の文脈を先行させながら〈仮想的状況〉を設定し読書指導と連関ないし往還する単元の学習構造の案を、まとめて提示した。

第2節では、カリキュラムの観点から中学校における稿者の学習指導実践个体史を検討した。まず時系列に个体史を綴り、次いで第1節と対応させる形で実践したカリキュラムを提示するとともに、その課題を示した。

第3節では、第1節のカリキュラム理論から把握される稿者の学習指導実践个体史上の未解明課題について、特に課題の多かった中2段階での実験授業単元を中学校カリキュラム・モデル(試案)に基づいて設計し実施して、検証を進めてきた。その課題とは、中学校第2学年における「理由づけ」の学習指導上の問題であった。これを克服するために本研究によって理論的に導かれる、教科書外教材の組み合わせ方と〈仮想的状況〉の設定の仕方を改善した実験授業を実施し、授業仮説を検証することで、理論と実践により提案した中学校カリキュラム試案の有効性を実証した。その結果、設計時に立てた授業仮説は総じて実証され、本研究で整備したカリキュラム理論の有効性が確認できた。

(終章)

終章では、第1節で第2章から第5章までの研究成果を総括し、第2節では前節を踏まえ序章の課題①～③に立ち返って、現状に対する今後の展望を提言した。

第2節で今後への展望として述べた提言の骨子は次の通りである。

- 1 読解指導からメディア・リテラシーへの接続に課題があること(①)について
 - (1) 小学校高学年から中学校段階でこそ読解指導と読書指導との連関をめざす
 - (2) 教科書教材を「典型」としてでなく「仮説」として扱う
 - (3) 試行錯誤と再挑戦の過程を単元内に保障する
 - (4) 「実の場」か〈仮想的状況〉を単元に用意する
 - (5) 「個人の文脈」を先行させ二つの「社会的文脈」へつなぐ単元展開を心がける
- 2 説明的文章教材の論理の捉え方に関し混乱が続いてきたこと(③)について
 - (1) 読者の「表現の論理」把握と「認識の論理」構築を重視する
 - (2) 論理的に読むことによって学習者に修辞の効果を検討させるようにする
 - (3) 非形式論理的知識を「情報の扱い方」として重視する
- 3 中学校段階での系統性になお不明確な部分があること(②)について
 - (1) 当該学年の段階とその年間に扱う各教科書教材の特性を意識する
 - (2) 第1学年においては「事実の見方」を重点的に扱う
 - (3) 第2学年においては「理由づけ」を重点的に扱う
 - (4) 第3学年においては「主張とその意義や価値」を重点的に扱う